



詩抄III 星の歌



鳴瀬羽迦

惑星の夢

手のひらに乗せた青い宝石に
水の惑星の夢をいつか見たんだよ
青い透きとおる光りに焦がれて
ほんの短い時間と交換した

いろいろなことが降り積もったね
嗚呼 記憶を埋め尽くして
もう 忘れてしまったのかな

青色の空を見上げてみたくて
空の色を映す滑らかな水に触れてみたくて
風の心地よさを知りたくて
きっと望んだのはそれだけだった

いろいろなことが意識を濁す
嗚呼 空には灰色が重ねられ
もう 二度とみることはないのかな

化石になった想いを掘り起こしてみるよ
意識の地中に眠るそれは
手のひらに乗るくらいの小さな結晶になっていた

水の星

雨が降るよ この星には

河が走る 海が在るよ

水の星だね この星は

透き通る水に 足を浸した

夏の思い出 どこに終われたの

心があるよ この星の住人には

涙があるね 海みたい

波をみてごらん 心みたい

もしかしたら命も そんな感じ

現れたり消えたり 波打っている

みんなひとつの 海から生まれて

みんなひとつの 星の上

ちいさなほしのゆめ

ちいさなほしの　うえ
いま　そらを見あげて
たいきはなにものをも
こぼむことなくつつむ

ちいさなほしの　たみ
わたしたちは　どこへ
むかいたいのだろうか

こんらんと　かっとう
ふかまるきずのいたみ
みんなしっているけど
くりかえしくりかえす

ひとりひとりのところ
にくしみもいとしさも
よろこびもかなしみも
むげんに　わきあがる
それはひとつになって
ちいさなほしのいしき

わたしたちは　どこへ
わたしたちは　なにを

そのといかけのこたえ
知っているはずなのに
おもうようにならない
ちいさな ほしのゆめ

空を仰いで

空を仰ぐと 雲に覆われているけど

昼には あの雲の向こうには青空があり
夜には あの雲の向こうには星空がある

天空は悠久のリズムを打ち続けている

人々から溢れ出す
たくさんのたくさんの想いが混ざり合う
マーブル模様の この地球

ほら 木星辺りからみると
小さな小さな点に納まって
あなたの胸に輝く 宝石の粒みたい

やがて気流に押され 雲間に青空が見えてくる
陽の光が差し込めば 黄金色に染まり始める雲に 涙拭われ

きっと 人の心もそうだよ

雲の向こう 青空は星空は広がっている
天空は悠久のリズムを打ち続けている

_**

人工の街

闇のせまる 夕暮れるとき
ドアを開けて 外気のなかへ
風が挨拶を 交わすよ
なめらかな気流 するりと

金星を目印に 坂を登る
丘の上 見晴らしのよい
風は渡ってくる 遊ぼうと

喧噪の街を 遙か遠くに感じる
灰色のビルも アスファルトの道も
夜に 沈んでゆく

浮き上がる 人工の灯を
綺麗だと 思うときもあるけど
見えなくなってしまった
あの星空の 遺骸のようにも感じ

人も この街のように
人工の生き物に なってしまうのだろうか
心も身体も その住処にあわせ 変化するのなら

ただ風だけが 今も 運んで来てくれる

忘れそうな 自然の息吹を

吹かれるまま 見つめる

深まりゆく 夜の空を

目覚めを待つ 微かな希望を

大地の矛盾

地球は一回りして
天の星たちに その姿を晒している

朝へと明けようとしている地の
その悲しみに オリオンが手を振る

どんな物語りを携えて
この夜 私たちの頭上に星座は輝くのだろう

戦乱の 彼の地の人々の息づかいや その家族の嗚咽
大気の中 微かなこだまが残っている

それらは風の音に変わり
享楽のビルの谷間を吹き抜けてゆく

オレンジ色を含みはじめた陽の光は
優しく 温かくあるけど

この大地の矛盾を
天の星たちは 見つめ続けている

そうして掃除機に吸われるように
みんな宇宙空間に吐き出されてしまう

地球は辛抱強い
とっても丈夫なようだけど
どこまで我慢できるのだろう

転寝

地球の背中に

私の背中を合わせて

寝ころんで

緑と青と白の世界を

眺めてた

うとうとと眠たい眼に

緑と青と白の世界が

混ざり合い

エメラルド色の夢を

見る

イマジネーション

未来の地球を思い浮かべてみたよ

宇宙に輝いていた 生命の輝きの星として

都市は水晶のように ほのかに青く光っている

人は森の中に暮らし そう まるで姿は見えないように

そして動物たちが自由に駆け巡っている

生活のエネルギーはクリーン

もう公害はない

人工の埋め立て地は天然の海岸線に戻っている

アスファルトの道もない

コンクリートのビルもない

見渡す限り 自然に還れないものはない

土が生きている

大地は緑に溢れ

澄んだ水が清らかに流れる

大海の透明度はどこまでも深く

海の生き物たちが賑やか

人は自然と調和して暮らしている

人々は調和して暮らしている

貧困もない

紛争もない

なんて自由なんだろう

なんて綺麗なんだろう

惑星も 大気も 水も そして人の心も

宇宙空間に輝いている 生命の輝きの星として

願

無限や永遠という
その感覚を知りたくて
宇宙に想い馳せ

でもいつしか有限の身を持って
始めて知るのだと思った
計り知れなき世界のこと

その計り知れなき世界すら
とても小さく感じるときもある
まるで胸の内にあるように

時間に縛られるなんて言うけど
時間には縛られていない
なぜなら時は私たちが紡ぎだしているのだろう

この身体に閉じ込められていると思ったこともある
でも閉じ込められているのではない
此処に私たちはそれぞれに窓を開いて生きている

扉は心にある
それは鍵すらついていない

その向こうにあるもの
その向こうにあるものは

想

肌を滑り 吹き抜けてゆく風は
地上に立つ私を 浮き彫りにするかのよう

大気に溶け込み 私たちは
この惑星（ほし）の全てと ともにあるのに

時々 ひとりの身体は
孤独で心を包み込むのです 風がそうするように

この身は魂の仮住まいと聴いても
私たちは生まれてくる前を知らず 死の先を知らない

たとえ転生を信じたとしても
その繰り返す者が何者なのか知り得ない

（少なくとも それは今の私の意識ではないと思うから）

その不案内を誰かが分離と呼ぶのを聞きました
なぜ そのような仕組みがあるのでしょうか

孤独 それは心の声無き声なのでしょうか
此処に思い出せない 何かを呼ぶ

孤独 それはあなたの声無き声なのでしょうか
目に映らずとも 途切れていないことを知らせる

此処にいるより遥かに永らえる
知り得ない 私からの

環

私にできないことも

あなたにはできる

あなたにできないことで

私にできることもある

そうして人は補い合って

大人が忘れてしまったことも

新たらしく設えられたステージで今

子供たちが経験している

そうして世界は回り

映る景色の緑が

日に日に濃くなってゆく

その萌える命の

見えない手に

心も掬い上げられて

支えられて

移り変わる季の

ときに悲しさを覚えたり

ときに楽しみを思ったり

私が私である場のあるかぎり

この身が朽ちて

すべて夢の中に還っても

冬眠

冬の眠り

雪解けを待とう

春を纏うために

今は小さな空間で

膝を抱え

夢を観よう

宇宙（そら）の始まり

星の誕生

命の始まり

心に銀河を鑲めて

想いを巡らすのも悪くない

温もる胸に

ここに在る

奇跡を感じつつ

レクイエム

雲が渡る青い空をみていると 自然体にもどりゆく心

澄み渡った星の空をみていると 高鳴りはじめる鼓動

風に馴染めば風景に溶け込み 点となる存在

目を瞑ると感じる 無数の想いが描く模様

長く尾をひく悲しみの曲線に 誰かの放った歓びの色が混ざり

いつしか陽溜まりのような温もりの音色に 星はふたたび包まれて

永遠

どこまで拡がるのだろう

どこまで深まるのだろう

それぞれの私という波を含みて

あなたは溶け込むすべてを待ち続けている

この世では役者は常に交代し
すべてが入れ代わっても
こうして私は私のままであるように
あなたもあなたであり続けるのでしょう

どこまで深まるのだろう
どこまで広がるのだろう

それぞれのあなたを波立たせて

私として現れれば
あなたを見つめ返し想う

やがて記憶だけとなり
再び集められるときを待ち続けるのかと

この孤独の海に漂いて
その呼び声に目を覚まし歌い返そう

永遠（とわ）に

それは完成することのない
でも何も余すことなく欠くこともない

全て

宇宙の涙

宇宙は涙の色 透かして

星の輝き 映した

遠くなる景色 ぼんやりと

ここから 眺めてた

またいつか 思い出して

謡に 口遊み

虚空に 綴るだろう

心の底にいまは 眠らせて

ただそっと 眠らせて

窓を 開け放つ

宇宙は銀河を 抱いていた

_**

銀河

渦巻く 銀河の

腕に 抱かれている

太陽の小さなコロニー

この星の すみか

この星を すみかにする

たくさんの いのち

銀河に 煌めく

鏤められた 星は

いのちの 軌跡のように

渦巻く 遥かなる天空に 眩く

透き通る闇の

光のない暗黒世界は

何か存在しても

手探りしなくては確かめられず

その正体も見極められない

判断できない状態の迷路のような時空

星の光を灯した宇宙に想う

確かめたかったのだろうか

自分自身の存在を

漆黒も透き通る闇と変わり

その美しさを眺める人間が

地球に生まれた

詩人

風に触れ

空を仰ぎ

森を歩み

星を数え

月に祈り

海を見つめ

口遊む想いは

地球の囁き

人は時に

詩人になり

魂に刻む

此処に生きた

密かな証を

最後まで目を通して頂きまして
ありがとうございます

詩抄III ～ 星の歌 ～

'98年～'04年の詩作品より

<http://p.booklog.jp/book/81119>

著者：鳴瀬羽迦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kotobanote/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81119>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81119>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ